保育者間の連携と保育理念を浸透するための組織の働きかけに関する研究
～保育理念の浸透の程度に着目して～
＜論文要旨＞

経営学研究科経営学専攻
人材・組織マネジメントコース　修士課程
青木　良美

本研究の目的は、保育理念の浸透の程度と保育者間の連携の状況、保育理念の浸透の程度と保育理念を浸透するための組織の働きかけの状況との関係について、明らかにすることである。

幼稚園での預かり保育や保育所での延長保育など、保育時間が長時間化している中で、保育者間でどのように子どもに関わる情報を共有し、連続して安定した生活をつくり出すか、つまり、子どもの育ちをチームで保障することが求められるようになってきている。チームで保育を実践するということは、保育者が同じ価値観のもと、連携して保育を実践するということだと考えられる。保育施設における保育に対する価値観を表現する一つのツールとして、保育理念があげられる。理念とは「信念や価値観」であり、理念の機能・効果の一つに「成員統合機能」(「バックボーン機能」と「一体感を醸成する機能」) があげられている。ここから、保育理念は保育者が保育実践について判断する指針として機能し、保育理念が保育者に共有されていることによって保育者間の連携がスムーズになり、一貫性のある安定した保育の実現につながると考えられる。しかし、実際に保育理念を共有し、保育実践を行うことは容易ではないとの指摘もある。先行研究からは、理念が浸透するまでにはいくつかのステップがあり、理念を理解している段階と理念に基づいて実践している段階の間には大きな隔たりがあること、組織の効果的な働きかけは理念の浸透の程度などによって異なることが確認された。

そこで、本研究では、保育理念の浸透の程度に着目して調査を行った。14 名の保育者に半構造化インタビューを実施し、 6 つの保育組織を保育理念の浸透の程度によって分類した上で、①保育理念の浸透の程度と保育者間の連携の状況との関係と、②保育理念の浸透の程度と保育理念の浸透のための組織の働きかけとの関係について、それぞれ分析を行った。

その結果、保育理念が浸透しているほど保育者間の連携がスムーズに行われていること、保育理念が浸透していない園であっても価値観を共有できる保育者間でのスムーズな連携は行われているが、属人的な対応にとどまることがわかった。

また、保育理念の浸透のための組織による働きかけは、「保育者に保育理念を伝える」、「保育者間が保育実践をすり合わせる環境を作る」、「保育者の多様な考えを認める」の 3 つに分類でき、保育理念が浸透している園では「保育者に保育理念を伝える」働きかけに加えて「保育者間が保育実践をすり合わせる環境を作る」働きかけと「保育者の多様な考えを認める」

働きかけも行われていること、保育理念が一部浸透している園では「保育者に保育理念を伝える」働きかけに重きがおかれていること、保育理念がまだ浸透していない園では「保育者に保育理念を伝える」働きかけは行われているものの課題があることがわかった。保育理念が浸透している園では、保育者間の対話を通じた保育実践のすり合わせが日常的に行われており、そのやりとりを通じて保育者は保育理念に基づく実践のあり方について常に微修正を行い、その積み重ねによって保育理念が浸透し続けていると考えられる。同時に「保育者の多様な考えを認める」働きかけを行うことによって保育理念に基づく価値観に保育者が凝り固まることを防いでいると考えられる。保育理念が一部浸透している園では、保育者によって保育理念に対する理解のズレや実践レベルでの考え方のバラツキがありうるため、園長や副園長、先輩保育者など、保育理念に基づく実践が体得できている保育者から伝えるコミュニケーションを中心におくことで、まずは組織全体への保育理念の浸透を図っているのではないかと考えられる。保育理念がまだ浸透していない園では、保育者が理解し納得できる形で保育理念が伝えられておらず、園長らの考えが押し付けられるような形となっており、保育者との十分なコミュニケーションも行われていなかった。保育理念がまだ浸透していない園において今後保育理念の浸透を図るのであれば、まずは園長らと保育者のコミュニケーションを増やすこと、その際、園長らの考えを一方的に押し付けるのではなく、保育者の意見も尊重しながら対話すること、そもそも保育者が保育理念に共感できていない場合は保育理念自体を変えるという選択肢ももつことが重要だと考えられる。

本研究の結果は、自組織における現在の保育理念の浸透の程度を分析した上で、組織としてどのような働きかけを今後行うか検討する際の一助になると考えられる。